

本多候一万石 山崎陣屋遺跡の変遷



陣屋の建物が残る山崎小学校50周年当時の写真

四百年前、池田侯が三万八千石で入封して宍粟藩が誕生し、二十六年間の治世で鹿沢の地に城郭づくりを行いました。ついで岸和田より松井松平侯が入封し、十年間。次に岡山の家分家の池田侯が三十年間。そして、本多侯が延宝七年（一六七九）大和郡山より一万石の山崎藩主として入封し、明治維新まで八代百八十九年間、山崎陣屋にあつて山崎近辺の領主として治世にあたられました。

それでは、山崎藩の中心であつた山崎陣屋は、その後どのような変遷をたどつたのでしょうか。

上の写真は、大正十五年（一九二六）山崎小学校創立五十周年記念の写真です。正面中央の左に「陣屋門（紙屋門）」があり、そこから左右に高い「練堀」が続き、正面中央の少し右側（〇〇の奥付近）には「隅やぐら」が見えます。そして、内堀あとの池をはさんで最も右側に「忠魂碑」が写っています。懐かしいふるさと山崎の原風景の一つです。

山崎陣屋は、現在の山崎小学校体育館から山崎西中学校正門付近一帯に築かれており、その周辺に屋敷なども建っていました。明治維新後も、いくつかの建物は存続して、山崎小学校の校舎の一部として使用されていたことが写真からもわかります。

そして、時代が大きく変わった終戦後の昭和三十一年（一九五六）、山崎小学校の創立八〇周年記念にあわせ学校図書館を建てるために、唯一残っていた「隅やぐら」も撤去されてしまいました。

一方、陣屋の西側にあつた下屋敷には、最後の山崎本多家直系のお二人、通称「亀さん」と「お姫さま」が住んでおられ、長年子どもから大人まで多くの人々に慕われておられました。終戦前後に相次いで亡くなられ、お屋敷も女学校の寄宿舎や山崎町公民館などの公共の施設に使用されることになりました。

その後、下屋敷はお屋敷全体が山崎中学校用地に転用され、やがて体

育館建設のため残されていた土蔵を含む全ての建物が撤去されてしまひ、今は山崎本多藩記念館の一隅にひっそり下屋敷の表門のみが残されています。

司馬遼太郎さんの『街道をゆく 第九巻播州揖保川・室津みち』（朝日新聞社・一九七七年）の中に、山崎の陣屋の様子が登場します。

かつて、山崎小学校で学ばれていた安田章生先生が「これです。この門が昔の校門でした。しかし」「堀なんです。堀が埋め立てられて無くなっているんです。私の子供のころは、水のある景色でした。」と話しておられるように、この辺一帯は、長い間陣屋の建物や堀などが残っていました。今では大きく変わってしまったのです。

山崎陣屋の門や堀のあつた場所には、山崎郷土研究会により石碑が立てられていますので、ぜひ陣屋周辺を散策して、往時の姿を想像してみてください。また、山崎藩本多家には多くの当時の文書や記録、絵図、所藏品などが残されており、例年五月の連休には、山崎本多藩記念館において、所藏品を公開しています。

いつの機会にか山崎藩の活躍の実態や領内江戸時代の細かい生活の様子など、日誌などの記録に基づいてご紹介できたらと思っています。

（公財）山崎本多藩記念館

代表理事 横井時成

編集後記

宮は今回しそウトピックスでも取り上げた伊和神社のある地域出身です。今年久しぶりに屋台を担ぎましたが、屋台の練習に行くと顔を知らない若者が何人かいました。「君はどこの子や?」「〇〇の息子です」「ああ、〇〇兄ちゃんとかか」などと会話を交わすうち、「そういえば20年ほど前に初めて屋台を担いだ時に、自分も同じようなことを聞かれたなあ」と思い出しました。地域に住むみんなが、世代を超えて一つになり、そこから交流が生まれる祭。やっぱりいいものです。エーンヤー!!

宮

広報しそ 11月号

平成27年11月13日発行(128号)

発行/宍粟市 編集/企画総務部秘書広報課 〒671-2593 兵庫県宍粟市山崎町中広瀬 133-6

☎ 0790-63-3000 (代) FAX 0790-63-3061 (代) ✉ info@city.shiso.lg.jp 🌐 http://www.city.shiso.lg.jp



この広報紙は環境保護のため、植物油インキと古紙再生紙を使用しています。

Public Relations SHISO
[2015.11]